

毎朝、同じ時間、同じ車両。押し込まれるように電車に乗るこの時間は、もうすっかり私の日常になっていた。

（う、今日も人すご……！）

人と人の距離はほとんどゼロで、逃げ場なんてどこにもない。誰かの腕や肩が触れるたびに、じわっと体温が伝わってくる。満員電車の、あの独特の湿った空気が肌にじっとりとまとわりつく。うんざりしつつも、最近はちょっとだけ楽しみにしていたりもする。

（今日もいる。……同じ場所に立ってる）

ドアの横、いつもの定位置。仕立ての良い濃紺のスーツに、一点の曇りもない革靴。周囲の疲れ切ったサラリーマンたちの中で、彼だけがまるで別世界の住人のように静謐で、圧倒的な存在感を放っている。

電車なんかに乗らず、運転手がついていそうな雰
囲気なのに、2週間前から見かけるようになった。
話したこともない。けれど見かけるだけで、嬉しく
なる。同じ空間にいと、つい目で追ってしまう。

(峯矢さん……)

話したことはないけれど、名前は知っている。

以前、ちょうど部下らしき人が乗り合わせたらし
く『峯矢さん！』と驚いた様子で駆け寄っていた。

『おはようございます』

『ああ、おはよう』

『峯矢さん、電車で帰られたんですか？ 前に人が
多くて苦手だって、おっしゃってたのに』

『……おい、声が大きい』

『あ、すみませんっ』

二人が話すのをもう少し聞いていたかったけれど、
次の駅で降りなければならず、後の会話は知らない。
けれどあのとき。表情を変えずとも、部下の方を見

ながら、逐一相槌を打つ姿を見て、私は目を離せなくなってしまったのだ。

(峯矢、さん……)

それ以来、私は勝手に彼のことを『峯矢さん』と心の中で呼び、毎朝の密かな楽しみにするようになっていた。

(……それにしても、今日も、すごい綺麗だなあ……)

整った横顔、冷ややかで無機質な瞳。高すぎず低すぎない鼻筋に、無駄のない輪郭。ほんの少し伏せられた睫毛の影までが、やけに印象的で目を引く。

無表情なはずなのに、どこか作り物みたいに整いすぎていて、見ているだけで息を吞んでしまう。

(……にしても、今日はどうしてこんなに混んでるの……っ！？)

いつもでも十分に窮屈なのに、今日はそれ以上に人が押し込まれている。次の駅でさらに人が乗り込んできて、背中をぐいっと強く押される。

肩と肩がぶつかるどころか、体同士がぴったりと貼りついて離れない。呼吸をするたびに、すぐ近く of 誰かの体温が混ざり込んでくる。

足元もほとんど動かせなくて、電車の揺れに合わせて身体ごと流されるしかない。次の駅でドッと人が流れ込んできて、私の体は濁流に飲まれるように押し流される。

「……っ、あ、すみません……っ」

「……いいえ」

肩がぶつかってしまい、顔を上げて謝罪すると、その人はあの『濃紺のスーツ』の人だった。整った顔がすぐ近くにあって、ドキンと心臓が大きく高鳴った。

（あ、あの人が……！ というか、近い近い！ 会社

までまだ結構あるのに……！)

前後左右を人間に挟まれ、身動きが取れない。そんな中、私の背後に誰かが立ったのを気配で感じた。
ぐにゅっ。

(え……？ いま、お尻に……なに……？)

スカート越しに、じっとりと湿った感触がお尻へと触れた。

ぐにゅぐにゅ。

それは明らかに、電車の揺れによる偶然の接触ではなかった。

「……っ！？」

(なに、これ……嘘、痴漢……！？)

声を出そうとしたけれど、喉が恐怖でひきつって音にならない。背後の男は、私が抵抗できないのいいことに、さらに大胆に手を動かし始めた。

すぐ目の前には、憧れの峯矢さんがいるのに。彼の視線は別の方向を向いたままで、私の背後で起きている惨劇には気づいていないみたいだった。

ぐい。

「……！」

男は太い指で、お尻の割れ目を力任せに上下させる。お尻の肉が左右に押し広げられる感覚に、私は羞恥心と嫌悪で顔がカッと熱くなった。

（お、お尻の割れ目に、指が……っ。食い込んできてる……）

ぐいぐい。ぐいっ。

男の指は、スカートの上から遠慮なく私のお尻を触ってくる。

「ふっ……………」

（なんでこんなことに。ここは電車の中なのに……）

そんな風に思うほど意識してしまい、余計に男の指を感じてしまった。

（やだ、そこ……っ。お尻の穴の、すぐ近くを……ごりごりしないでよ……っ）

お尻の肉が左右に押し広げられ、スカートの生地が皮膚に強く擦れるたび、じわじわとした痺れが下腹部へと昇ってくる。

（う、嘘……。私、こんなことされてるのに……。気持ち悪いはずなのに……）

男の指は、今度は片方のお尻のふくらみを、手のひらでぐにゅうっと力強く掴んで、揉み解し始めた。

ぐにゅう。ぐにゅうぐにゅう。

「ん、っ……。……は、あ……っ」

（そんなに強く、お尻、揉まないでよ……っ。熱い、熱いよ……っ♡ お尻の奥の方が、じわじわ痺れてきちゃう……っ）

男の指が、スカートの上からかりかり、と爪を立てるようにお尻の際を触り始めた。

かりかり。かりかり。

「……ふ、う……」

嫌悪感でいっぱいのはずなのに、段々と身体の奥が熱を持っていく感覚に襲われる。

「はぁ……っ」

男の指先が、お尻から少しずれて、おまんこの方をすすっと指でなぞった。

「ひゃ、ぁ……っ！？」

（い、いま、おまんこの方……っ！ 次は、そっち

なの……？)

そんな私の葛藤を知ってか知らずか、背後の男は私のスカートの裾に手を入れた。そして、男の大きな手が、直接肌に触れる。

さわ。

(あ……！ 手が……直接、太ももに……っ！)

男の指先は、太ももの外側をするする、と撫でた。

「っ……。……は、あ……。っ！」

指が内側に移動した。自分でもあんまり触らないような、柔らかいところに、大きな手のひらが包み込むようにして置かれる。そしてつと、内腿の付け根に向かってゆっくり上がってくる。

男の指先が、時折カリカリと爪を立てるように、細かく執拗になぞり上げる。その微かな刺激が、脚の付け根から下腹部へと、痺れるような震えを運ん

できた。

っー。かりかり。

「ふ……っ。……はぁ……っ」

（そんなに、ゆっくり……なぞられたら……っ。どうしよう、どうしよう……っ）

電車の揺れに合わせて、男がもう片方の手でお尻をぎゅうっと揉んでくる。

その間にもゆっくり、ゆっくり上がっていた指はついには、おまんこのすぐ近くまで到達した。

（あ、あ！ 手が……！）

男は、私の戸惑いと微かな震えを楽しむように、太ももの内側の柔らかい部分をぐにゅぐにゅと力強く掴んで、揉み解し始めた。

ぐにゅっ。ぐにゅぐにゅ。

「ん、んんっ……。ふ、あ、はぁ……っ」

(あ、ああ……っ、熱い……)

最初はただの恐怖だった。でも、執拗に繰り返して触れられていたら、内腿がびくびくと小刻みに震えて、おまんこの奥がじっとり重たくなってしまった。

「ん、ん……っ。……は、あ、はあ……っ」

(おまんこの近く、かりかりしないでよ……っ。あ、声、出ちゃったら、どうしょ……っ)

執拗な指の動きに、私の意識が少しずつ霧に包まれていく。恐怖や嫌悪感はいつの間にか、薄れている。それでいて、今度は抗いがたい『熱』に支配されそうだった。

(このままだと、まずい……)

どうにかしなきゃ、と顔を上げたとき。
峯矢さんと目が合った。

「あっ……！」

彼は、私の顔をじっと見つめている。私の、情けなく歪んだ顔を。必死に何かを堪えて、熱い吐息を漏らしている、淫らな表情を。

（……見られた。……峯矢さんに、私のこんな姿……っ！ はしたない……っ、太ももを、見知らぬ男の人にいいように弄られてるの、バレちゃった……っ）

私が思わず視線を逸らしても、射抜くような視線が私の方を向いているのがわかる。どこかに逃げたくても、人が多すぎて逃げることもできなかった。

（やだ、峯矢さん……見ないで……！）

男の指は、峯矢さんの視線に気づいているのかいないのか、さらにお尻の割れ目をごりりっと、より深く、より強く擦り上げる。